

多氏の向ひ今金澤神社の地邊なるよし、延寶金澤圖に載せたり。されば元和五年に波着寺と共に寶圓寺も移轉を命ぜられたるならんか。さて今の地へ移されたる後も、堂宇は府城の方へ向け、寺門も石川門と對するやうに建立せしかど、寛文九年に參議中將綱紀卿再建の時、今の如く造營を命ぜられたりといへり。菅家見聞集に、寛文九年寶圓寺佛閣僧坊新に修造被_レ命、寺門を改めて小立野馬坂の上に開き、額を護國山と懸けらるとありて、此の時本堂、客殿、庫裏、山門等、伽藍悉く造營ありしかど、寶曆九年四月十日の火災に罹り、悉く烏有と成り、其の後三年にして再建あり。然るに明治元年二月再び焼亡して假堂とは成りたり。又舊藩中當寺は常に江湖會を勤めけり。江湖會の起原は延寶四年なりといへり。

○開山大透圭徐和尚傳

師諱圭徐、字大透、俗姓戸田氏、尾州人也。師在孩提不嬉戲。自有出塵之操。父母知是法器。乃命出家。登壇之後、肩錫遊方。奮志參叩。到寶圓見正敬和尚。一見如夙識。即次意依附。听夕侍奉不懈。遂受法印。實普濟善教禪師八世之裔也。初住寶圓。繼徙龍泉。復據惣持。前田利家卿素饗師道。一日學靈雲見桃花悟道話。以示單提要。利家言下領旨。天正六年利家卿守于能州。爲追薦先妣冥福。於七尾莊創長齡寺。迎師居之。癸未夏、領加越能三州。移居金澤城。於是招師。新創建大禪苑。師山名護國。寺號寶圓。以慕其本也。師示衆曰。大陽堅禪師僧問。如何是玄旨。堅曰。壁上挂錢財。諸人還會得也無。良久曰。多謝春風無厚薄。貧家桃李也成陰。其年能惣持。有壽攸之災。元亨上爲官寺。所賜詔書亦爲烏有。皆以爲宗門大患也。戊子秋師上京師。告勸修亞相光豐卿。以達皇聞。皇上可其奏。再賜詔書。爲祝聖第一道場。實是師之力也。文祿癸巳。師告太守再造惣持。輪奐壯麗。視古有以加矣。明年甲午。師與檀越齊議。以護國符象山。退藏長齡。慶長三年戊戌季秋月二十日謝世。嗣其法者三人。曰倚松菊。曰象山芸。曰用山徐。

右洛北沙門良機の撰述せる重續洞上諸祖傳に記載せり。按ずるに、天正六年利家卿守于能州。爲追薦先妣冥福。於七尾莊創長齡寺。迎師居之。とあるは、天正九年十月能登國を賜はりて、七尾入城の後一寺を建立、越前國高瀬寶圓寺

より大透和尚を迎へて開祖となし、寺號をば即ち寶圓寺とせられ、後に長齡寺と改稱す。延寶二年の長齡寺由來書に、當寺は能州御入國被_レ成天正年中御建立、越前國府中之近所高瀬寶圓寺之住持大透和尚御被_レ遣、當寺之住持に被_レ仰付。越前に被_レ成御座時、御母堂御死去被_レ成、導師大透和尚相勤、御戒名季號長齡妙久大姊、御影、御位牌當寺に御安座被_レ成。とあり。又長齡寺留記に、開山大透和尚越前より御招きの御使者は、井口茂兵衛被_レ相勤旨申傳候。又當寺往昔は護國山寶圓寺与申候處、金澤に寶圓寺御建立之後、三輪藤兵衛より能州寶圓寺之儀被_レ相伺處、御兩親之御爲に被_レ仰付候旨に而、休岳山長齡寺と改號被_レ仰付由。とあり。長齡寺二世用山和尚判書の寫。

高徳院様金澤城に御引越に付、弊師大透和尚於金澤寶圓寺御建立被_レ仰付爲成開山、扶持等給也。其後大透和尚隱居御願相濟、當寺に引籠被_レ成候。其節爲隱居扶持年々七拾人扶持被_レ下置候。慶長三年九月廿日に被_レ致遷化。依而右之扶持御取上に付、孫四郎様に願上。

祖父 休岳道機庵主
祖母 長齡妙久大姊 兩尊靈

爲茶湯料十五人扶持拜領任。以是永代伽藍等可致守護者也。

慶長六年三月

長齡寺用山判

又能州總持再興の事は、利家卿の印書等今總持寺に傳來す。利家卿印書寫。

態令啓候。仍能州惣持寺之儀、打捨置もいかゞにて候間、此度とりたて可申候。材木等をも内々取集候様に尤候。人足などの儀、藤兵衛、久兵衛に申付候。此たびはこけらぶきの下地に可被_レ仰付候。作事様子彼兩人に被_レ仰聞候て、令書付可給候。恐々謹言。

亥二月十四日

利家判

寶圓寺

按ずるに、右は天正十五年丁亥二月の親簡なるべし。前顯の大透和尚傳に、文祿癸巳師告太守再造惣持云々。と載せたるは過聞ならんか。文祿癸巳は二年にて、天正十五年より七年後也。

○前田家靈堂

舊藩中は寶圓寺・天徳院の兩寺をば兩刹と稱し、前田家の